学習意欲と学力を高める小学校学級経営の事例研究
―「集団でつくる学力」の意義再考―

稲田　　綾・五十嵐太一・丸山　剛史

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第7号　別刷

2020年8月31日

学習意欲と学力を高める小学校学級経営の事例研究†
―「集団でつくる学力」の意義再考―

稲田　　綾*・五十嵐太一*・丸山　剛史**
栃木県公立小学校教員*
宇都宮大学共同教育学部**

本報告は学級生活満足度だけでなく，いわゆる学力，学習意欲も高い学級の学習・生活指導に関する小学校学級経営事例調査報告である。授業･学習活動の参加観察，担任教員へのインタビュー，児童へのアンケート調査により次の特徴が明らかになった。1）児童は1日のほとんどをグループで集団的に活動していた。2）担任は児童の個性を生かしつつ，学級への所属意識が高まるような仲間づくりを重視していた。3）児童へのアンケートでは自己有用感を高めることを企図して担任が重視していた係活動が評価されていた。

キーワード：学級経営，小学校，学習意欲，学力

1．緒言

本報告は，学習意欲及び学力向上を促す小学校学校級経営の事例調査報告である。本報告では，いわゆる学力テストの平均点が高く，しかも学級生活満足度の高い学級を取り上げ，1）授業・学習活動の参加観察，2）学級担任へのインタビュー，3）児童対象のアンケート調査を行うことにより学級経営上の特徴を明らかにすることを目的としている。

筆者の1人（稲田）は4年間学習指導主任を務め，所属学校全教員の授業を参観したり，研修を企画する機会を得た。こうした経験から学級経営のあり方に関心を抱くようになった。そして学習指導主任の業務に従事するなかで，いわゆる学力テストの平均点が高く，しかも学級生活満足度も高い学校・学級があることを知った。A市立B小学校第4学年I教諭の学級（児童数25名）である。近年，いわゆる学力と学びに向かう力とが求められるなか，上記のような同学級がどのように創られるのか知りたいと考えるようになり，上記の研究課題を設定した。

2．対象学級について

2－1　対象学級の実態

(1)「とちぎっ子学習状況調査」の結果

栃木県教育委員会が小学校第4・5学年児童（及び中学校第2学年）を対象に実施する「とちぎっ子学習状況調査」における対象学級の平均正答率は，以下のとおりである（2019年度）。

国語77.9（A市平均66.4，栃木県66.2）
算数84.0（A市平均74.1，栃木県 74.1）
理科76.5（A市平均66.0，栃木県64.1）

すべての教科において県や市の平均正答率より約10ポイント以上高い値を示している。国語「書く能力」の正答率は68.4（市50.4），算数「数学的な考え方」は72.8（市57.5），理科「科学的な思考・表現」は73.3（市61.0）と市の平均正答率と比較し，著しく高い値を示している項目もあった。

(2) Q-U調査の結果

対象学級のQ-U（Questionnaire-Utilities）調査（2019年7月5日実施）結果は以下のとおり。

学級生活満足群・・・・・・・・24名（96.0%）
侵害行為認知群・・・・・・・・1名　(4.0%)
非承認群／学級生活不満足群・・0名

---

† Aya INADA*, Taichi IGARASHI* and Tsuyoshi MARUYAMA**: A Case Study of Classroom Management that enhances desire for learning and academic achievement
Keywords: classroom management, elementary school, desire for learning, academic achievement

* Public Elementary School of Tochigi Prefecture
** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
（連絡先：marusan@cc.utsunomiya-u.ac.jp　著者3）

やる気のあるクラスをつくるためのアンケートでは,友人関係11.6（全国10.1）,学級の雰囲気11.9（全国10.0），学習意欲11.2（全国9.6）であり，すべてにおいて学級平均が全国平均値よりも高く，総合点においては高意欲児童群（総得点32点以上）に入る児童が25名中23名（92%）おり,低意欲児童群（総得点28点未満）に入る児童は存在しなかった。

3. 授業・学習活動の観察

2019年4月から9月にかけて対象学級に計15回訪問し，児童が登校してから下校するまでの時間を教室等にて観察し，学級の授業・学習活動の特徴を把握しようと試みた。

1日の授業・教育活動を観察してみると，同学級における児童の学習形態に関して，朝からグループになっており,1日中ほぼすべての学習活動をグループで行っていることに気づく（図1）。

図1

児童は登校後，ランドセルの片付けなどの学習準備が済むと，数人の児童が黒板に向かい，クイズや本の紹介,漢字の成り立ちなどを書き始める（図2）。

図2

朝の会では，その板書を使った活動をそれぞれの係が提案し，クラス全員で行う。

国語の物語の学習ではグループを解体し,全員で意見交換することもあったが,教員の発言は少ない。

授業を観察して気づいたことは，いわゆる一斉指導の場面が少なく，児童たち自身で自主的に活動する場面が多いことである。

その他，児童の学級生活では各自が考えた係活動が日常化され,グループの中にも自分の役割がある。

また,児童同士が教え合ったり助け合ったりすることが，きわめて自然に行われている（図3）。

図3

教科によって,教える子と教わる子が入れ替わることもある。「わかった！」と声を上げると同時に席を立ち，困っている友人の座席に行って話し掛けたり，1つの課題をみなで話し合ったりする姿もしばしば見かける。黒板やホワイトボード等の学習用具を使って説明したり，授業終了後も課題解決のために話し合いを続けていたりする姿が見られた。その姿は自ら学習に向かっていくように見受けられた。

4. 担任教員の学級経営に対する意識

対象学級はいかなる考え方のもとに成り立っているのか。学級担任の意識と取り組みに関してインタビューを試みた。要点として以下の点があげられる。

①安心（ルール）づくりと仲間づくり

・話しやすい場の設定（いつでも・どこでも・誰とでも）／・聴く指導の徹底

・係活動・当番活動の工夫・充実を図り，自己有用感を高める

②個を伸ばして集団を伸ばす，集団を伸ばしてさらに個を伸ばす

・活動しやすいグループではなく，児童一人一人の伸ばしたい力を考え，意図的な座席・班づくりを行う

・振り返りや日々の活動の中で，個人の伸びを見逃さず，誉める

・「自分のクラスは最高！」と児童たちに日々，実感させ，所属感を高める働きかけ
・場面に応じてリーダーを活躍させる
③「一人も置いていかない」：学び合うことは寄り添い合うこと
・「できない，わからない」と言える人間関係をつくる
・一人の「できない，わからない」ことを大切にし，みんなで考える指導
④児童同士が学び合うことにより，児童たち自身の学級をつくる
・教えない指導・学び方を教える指導
・一人では解けない課題・高い課題を提示することにより，学び合う必然性・達成感を生む。
・隙間時間の有効活用（小さな達成感・上達感を重ねる）

児童一人一人の個性や存在が生かされ，学級への所属意識が高まるような仲間づくり，集団づくりが重視されている。具体的には，係活動・当番活動の工夫・充実が行われている。そのうえで児童同士が学び合う意義を感じられるような課題設定・提示が心がけられている。I教諭は佐藤学氏の「学びの共同体」実践先進校に勤務し，「学びの共同体」，共同的な学びに関心をもち，実践を試みるなかで上記の点に留意するようになったという。

現在はさまざまな取り組みを行っているI教諭だが，教員就職時から円滑に学級経営を行うことができたわけではない。過去には，全員が課題を終わらせることに固執し，周囲の児童とともに熱心に教えた結果，逃げ出してしまった児童もいたという。近年の取り組みは，こうした自身の失敗経験，挫折経験に裏付けられたものであるという。

5. 児童の学級生活に対する意識

対象学級の児童の意識に関して，Q-U調査では把握できない点を確認しようと独自のアンケート調査を担任とともに実施した。質問は次の9項目である。

1. このクラスにいて，楽しいと思いますか。
2. クラスの友達は，声をかけてくれたり，親切にしてくれたりしますか。
3. 自分は，クラスの人から仲間だと思われていると思いますか。

4（1）クラスで勉強していて，楽しいと思いますか。
4（2）どんなところが楽しいですか。

5. もっと勉強ができるようになりたいと思いますか。

6（1）グループで学習するのは楽しいですか。
6（2）それはどうしてですか（いくつ選んでもいいです。）
・友達と話し合える／・わからないことを教えてもらえる／・仲がよくない人と話すのが苦手／・難しい／・そのほか（　　）

7. クラスの人たちは、自分の話をちゃんと聞いてくれると思いますか
8. 自分が何かうまくいかなかったとき，クラスの人がはげましてくれたり，助けてくれたりすることがありますか？
9. このクラスのよいところを教えてください。

質問「1」に対して，すべての児童が「はい」を選択しており，すべての児童が所属学級での学級生活を「楽しい」と感じていることがわかる。

「4（1）」に対しても，24名の児童が「はい」を選択し，残り1名も「いいえ」ではなく，「どちらでもない」を選択しており，児童は所属学級で学ぶことを楽しいと感じていることがわかる。

「4（2）」の自由記述回答をみると，「グループや友だちと話す時，自分とちがう考えが出るところ」，「みんながわからないところをみんなで考えたりすること」など，回答の約8割が友人との関わりや集団の意義について記していた。

また，担任教員が学級において集団的に学ぶことを重視していたため，集団的に学ぶことについて「6（1）」のように問うた。その結果，23名の児童が「はい」と答え，1名が「いいえ」（理由：仲がよくない人と話すのが苦手），残り1名が「はい」と「いいえ」の両方（理由：意見が合わなくてけんかになる，意見が合うと楽しい）に○印を付けていた。

グループでの学習が楽しいと回答した理由として多かったのが「わからないことを教えてもらえる」（42%），「友達と話し合える」（35%）であり，友人と関わりについて記していた。

「9」でも「わからない人にたっぷり時間をつかうところ」，「友だちや友だちじゃなくても，わからないことがあったら助けてくれる」など，児童同士の関わりに関する記述が全体の半分以上を占めていた。「やる気がある」という趣旨の回答も12%あり，「国語のじゅぎょうのあと，やすみじかんもその話をしてて，すごいな～って思いました」などと記されていた。

係活動に関する記述も多く，「係がみんながたのし

めることや嬉しいことをみんなができる」,「係もいっぱいあって，とてもおもしろく楽しいクラス」と記されていた。こうした記述から児童たちがクラスの構成員のために自主的に係活動を行っていることがわかる。

そのほか，対象学級における,意図的な座席・班づくりが児童の学力を高めるために有効であることもわかった。ただ，児童の感想には，教えることでもっとわかるようになる，といった記述はない。児童は，困っている子を置いていかないという意識により友人に教えていることがわかるが,「友だちがわからないとき教えてあげること」を楽しいと答えている意見もあり，自分自身が「できた！」という達成感だけでなく，友人が理解できたことにより達成感や上達を感じていることもわかる。児童の学級生活及び学級で学ぶことに対する肯定的な意識が高いことが確認できたが，それは，児童同士が関わりながら集団で学ぶことを評価するものであった。

6. 集団でつくる学力の意義再考

集団で学ぶことと子どもの学力向上とはどのような関係にあるのか，文献をもとに考えてみたい。

吉本均は「子どもたちが順接,逆説の接続語によってからみ合い，討論が展開されるような授業のなかで，子どもたちの思考＝表現力が鍛えられ，学習意欲が活性化する」と述べている[1]。

坂元忠芳は，グループでの学び合いの中には,「友だちを説得しようとする子どもたちのユニークな言葉が生まれ」，その行為により単純な思考からより複雑な思考へと変化することにより,言葉が発達し,「子ども同士のコミュニケーションを豊かにするだけでなく，一人ひとりの子どもの内面を豊かに」すると述べている。また,「理解が深化したり，それが記憶に強く焼きつくのは，意味があるつまずきをきたした後である場合が多い」ともいう[2]。思考の対立，仲間にわからせることを通して自身がわかっていくこと，習得した知識を自分で噛み砕き，間違いやつまずきを通してわかっていくことが真の学力に繋がっていくと述べている。

柴田義松は「子どもたちがお互いの個性を認め合い，助け合う学習集団づくりに子どもたち自身が積極的に努める様に指導することが必要」,「自由にのびのびと発言することが出来ないような教室では，問い続ける子どもは育たない」と述べている[3]。

また吉本は「班づくりとは，子ども・生徒たちの「居場所づくりの営みにほかならない」,「居場所だと実感できるのは,子どもたちが「達成感」「上達感」をもつことができたときである」と記している[4]。

坂元は,「集団でつくる学力」と表記していたが、改めてその意義を考えさせられた。

7. まとめにかえて

以上の検討から次のことは指摘しておきたい。

(1) 学級での生活が楽しく，しかも，いわゆる学力も高い学級づくりは可能であるということである。I教諭がそれを証明している。ただ，I教諭も失敗経験を踏まえて学級づくりの要点を掴みつつあり，今後の取り組みに注視しつつ経験を理論化してみたい。

(2) 対象学級では，担任教員が集団的に学習することを意識し，グループでの学習を常態化し，児童もその意義を実感できていたということである。外見的にも，内面的にもグループで学習していたことはI教諭の学級での学習活動の重要な特徴の一つであったと考えられる。「集団でつくる学力」の意義を再考する機会となった。

(3) I教諭がグループでの学習に際して,「一人では解けない課題･高い課題を提示することにより，学び合う必然性・達成感を生むこと」に注意を払っていたことは看過できないであろう。グループで学習するという形態だけでは十分でなく，その意義が感じられる取り組みが必要であるということである。

(4) 学級での学習と生活は密接に関係しており，係活動・当番活動を活用して児童一人一人が学級への所属感，学級での自己有用感を高め，安心して生活・学習できる条件・環境がつくられていたことも忘れてはならない。

参考文献

1 吉本均『学級の教育力を生かす吉本均著作選集3 学習集団の指導技術』明治図書，2006年，p.208

2 坂元忠芳『子どもと学力』新日本出版社, 1983年, p.62,p.147

3 柴田義松『柴田義松教育著作集8　学習集団論』学文社，2010年，p.105

4 吉本・前掲書，pp.185-189

令和2年4月1日 受理

A Case Study of Classroom Management that enhances desire for learning and academic achievement

Aya INADA, Taichi IGARASHI and Tsuyoshi MARUYAMA